

《研究ノート》

文学史研究の方法的反省の

ための一観察(1)

——ソ連における文学史学の新動向について——

藤井一行

- 一 研究計画の進展
- 二 文学の比較的研究への動き
- 三 『世界文学史』の構想
- 四 文学史認識の主要特徴

マルクス主義史学が一般にそうであるように、マルクス主義文学史学もまた、文学の歴史にかかわるいわゆる法則的認識を通じて人間解放のたたかいに寄与せんとする学問であると言つてよいであろう。しかしながら、そこからして、法則的文学史認識というものがそのまま無媒介的に——すなわち、研究課題や方法の適否、あるいは認識対象の是非などとかわりなく——人間解放のたたかいに寄与しうる、と考えることは妥当ではあるまい。言いかえれば、マルクス主義文学史学にあつても、いわゆる『課題的認識』として歴史学者の中から提示さ

れている研究の態度や方法というものをあらためてそなえることなしには、具体的かつ歴史的であるはずの解放のたたかいに多少とも積極的に参加し、寄与することは不可能である、と考えられるのである。そして、諸外国のマルクス主義文学史学の研究動向について観察を試みることは、わが国のマルクス主義文学史学の右の意味での自己変革のために不可欠な作業のひとつである、と思われる。しかし、このばあい、マルクス主義という前提の共通性のゆえに、現実には歴史的問題状況を異にするであろうところの諸外国における文学史研究の課題や原理や方法を、所与の学問の歴史性への顧慮なしに摂取することは避けなければならないであろう。

小論では、およそ以上のような視角から、ソ連科学アカデミー文学・言語部における最近——一九五七年前後から——の文学研究の動向について概観を試み、主に文学史研究の領域における研究意識上の若干の主要特徴を指摘してみようとした。

一 研究計画の進展

ソ連科学アカデミー文学・言語部における文学研究は、いわゆる『個人崇拜』批判を契機としてそれまでのいわば知的萎縮から解放されはじめて以来、きわめて意欲的かつ創造的な姿勢を示すにいたつたようにみえる。そして、その研究意識のうえでの最大の特徴は、世界的視野の形成への努力にある、と言つてよい。

科学アカデミー文学・言語部では、ソ連共産党第二〇回大会

(五六年)の直後、早くも、従来ほとんど看過されてきた諸問題の研究に着手しはじめた。すなわち、同部は、文芸学の「基本的科学的問題」として、第一に、芸術文学の発展の法則性、第二に、世界文学におけるリアリズムの発展の基本的諸段階、第三に、社会主義リアリズムの方法の発生と発展、第四に、諸民族文学の相互連関と相互作用、の四研究課題を選定し、同部付属の世界文学研究所では主要任務として世界文学の発展の諸法則性の研究をあげ、第一に、個々の民族文学の研究、第二に、諸民族文学間の相互連関の研究、第三に、世界文学と呼ばれる現象の成立、内容、形式の研究、の三方針を掲げた。⁽¹⁾そして、右の諸課題の研究の第一歩として五七年四月には「世界文学におけるリアリズム」をテーマとする討議集会が開催された。この集会およびその前後に展開された討議は、従来、解決済みとして等閑視されてきたきらいのあるリアリズムの諸問題の本格的な研究にはじめてとりくむという画期的意義をもつものであった。⁽²⁾

その後、五九年三月、いわゆる七カ年計画の実施にともない、科学アカデミー文学・言語部は、第二一回党大会(五九年)によって提起された新たな文化建設の任務にこたえることを目的に、一九五九―六五年の七カ年計画としてあらためて次の研究方針と研究課題を決定するにいたった⁽³⁾(言語学関係は割愛)。

第一方針——社会主義リアリズムの文学の発展、国民の共産主義教育におけるその役割、古典的芸術遺産とのその連関。

研究課題——(1)文学と社会主義社会の人間の教育、(2)ソ連諸民族のソヴェト文学の発展の法則性、(3)世界文学における社会主義リアリズムの成立と発展、(4)諸民族のリアリズムの伝統と社会主義リアリズムの文学、(5)文学理論の基本的諸問題およびブルジョア文学理論の批判。

第二方針——世界文学におけるリアリズムの発展の諸段階。

研究課題——(1)他の創作方法との相互連関におけるリアリズム、(2)文学上のスタイルの発展の法則性、(3)ロシア文学、西洋および東洋の文学におけるリアリズムの発展の基本的諸段階。

第三方針——諸民族文学の発生と歴史的発展の法則性、その相互連関と相互作用。

研究課題——(1)諸民族文学の歴史的相互連関と相互作用、およびマルクス主義文芸学におけるこの問題の研究の方法論、(2)ロシア、ドイツ、イタリア、アメリカその他の個々の民族文学の歴史にかんする普遍化的研究。

第四方針——民衆詩の歴史と理論。

研究課題——(1)ソ連諸民族の叙事詩、(2)フォークロアの歴史的發展、(3)現代の口承文学。

以上が、七カ年計画の当初の内容であったが、六〇年には新たに「一九五九―七五年の文芸学・言語学にかかわる科学的研究展望計画」が決定される。この「展望計画」は総じて「共産主義建設の時代の文化発展」と「文学の教育的役割の拡大」の要請にこたえようとするものであり、従来の研究七カ年計画にさらに、人民民主主義諸国および資本主義諸国の文学のそれを含

む、社会主義リアリズムの問題、古典芸術遺産の問題の研究の規模の拡大と水準の向上、ソ連邦諸民族文学史および世界文学史の編述という諸課題などを新たに加え、全体として一二の研究方針から成るものであった。また、六一年には、ソ連の學術が最短期間にあらゆる部門で世界での先駆的地位を占めるべきことを要請した党中央委員会と政府の決定に応じて、「マルクス・レーニン主義文藝学の理論」、「社会主義世界体制と世界文学の発展の新しい法則性」(傍点筆者、以下同断)の二研究方針を再追加するにいたった。

その後、以上に述べた研究方針および研究課題の主要部分に変更されていないようにみられるが、第二二回党大会(六一年)の前後に再度、研究計画の点検がなされ、党大会が定めた文化建設に参加すべく、「共産主義社会の文化の建設に直接的意義をもつ緊要な理論的問題」の究明にまず力を注ぐという観点から現行の「科学研究七カ年計画」に若干の修正がほどこされ、テーマの廃棄、追加がなされている。

この間、主なものだけでも、社会主義リアリズム(五九年)、諸民族文学の相互連関と相互作用(六一年)等の問題についての討議集会がやはり全国的な規模で開催されており、また、この間に刊行された注目すべき研究成果の中には、通史として、『ロシア批評史』(二卷)(第一卷(五八年)、第二卷(五八年))、『ロシア文学史』(三卷)(第一卷(五八年)、第二卷(六三年))、『ロシア・ソヴェト文学史』(三卷)(第一卷(五八年)、第二卷(六〇年)、第三卷(六一年))をはじめとし、ギリシア、ロー

マ、フランス、ドイツの多巻物の文学史があり、リアリズム研究では、リアリズム討議集会の報告・発言を収録した『世界文学におけるリアリズムの諸問題』(五九年)、『社会主義リアリズムと古典遺産』(六〇年)、『外国文学における社会主義リアリズム』(六〇年)、『一九世紀ロシア文学のリアリズムの諸問題』(六一年)、『リアリズムと他の創作方法とその関係』(六二年)、方法論研究として『レーニンと文藝学の諸問題』(六一年)がある(文学の相互作用にかんする研究成果については次節で言及)。

(1) Известия АН СССР, серия литературы и языка

(以下 Известия と略記), 1957, вып. 3, стр. 275—277.

(2) この集会では、たとえば、リアリズム概念をいかに規定するか、リアリズムの発生の時期をどの時代におくか、その発展諸段階をいかに把握するか等の問題が論じられ、それらの問題がほとんど未解決のままにすこされてきたことがあらためて自覚されるにいたった。Проблемы реализма в мировой литературе, 1957, АН СССР 参照。
本書はリアリズムにかんする討議集会での報告・発言を収録したものである。

(3) Известия, 1959, вып. 3, стр. 278.

(4) Ibid., 1960, вып. 3, стр. 250 以下。

(5) КПСС о культуре, просвещении и науке, 1963, стр. 493 参照。

(6) Известия, 1961, вып. 4, стр. 354 以下。

(7) Ibid, 1692, Bann. 1, crp. 82. ちなみに、「このさい、あまり緊要でないとして、二九のテーマが廃棄され、三〇の新テーマが加えられたという。Ibid., crp. 4.

二 文学の比較的研究への動き

「諸民族文学の相互連関と相互作用」と呼ばれる研究課題は前述のように五七年にはすでに研究計画の一部として提起されていたのであるが、五八年に同テーマについての『研究資料』(I・アニシモフ以下一名の研究者集団の作成になるもの)が発表されたのを手はじめに、方法論上の諸問題にかんするいくつかの論文があいついで発表された。そして、六〇年には全国から四〇〇名を越える文学研究者が集ってこのテーマについての討議集会が開かれるにいたった(この集会での報告・発言は『諸民族文学の相互連関と相互作用』という書名で刊行された)。本節では、このような研究課題がいかなる文学現象を、いかなる方法で、いかなる理由や意図から研究しようとするものであるのか、を観察してみたい。

文学の相互作用の研究にさいしてだれでもすぐ想起するのはいわゆる比較文学である。ところが、この問題にかんして発言しているソ連のほとんどすべての研究者は、比較文学を「主観主義的」、「経験主義的」ないし「ヨーロッパ中心主義的」な学問として拒否し、いかなる文学現象をもイデオロギー的上部構造として、階級闘争の反映として見るマルクス主義的方法というものをこれに対置し、比較的方法は決して自己目的ではない

く、マルクス主義的研究の一の方法にすぎないことを強調する⁽²⁾。しかしながら、「相互連関」や「相互作用」なる概念が具体的にいかなる現象をさすものと、また、それがいかにして生起し、文学史上いかなる意義をもつもの、と理解するか、さらに、右の研究課題のもとになにを明らかにしようとするか、等の諸点については論者の意見は一致していない。

前記の『研究資料』においてはこの「相互連関と相互作用」なる文学現象についての理論的究明はなされていないが、全体としてはそれは広い意味での「影響」関係として提起されているようにみえる。そのことは、当面の研究課題例として、シェイクスピア、ゲーテ、バルザックあるいは一九世紀ロシア文学などの世界的意義、ソヴェト文学の国際的連関、ソ連諸民族の文学の相互連関と相互作用、ヨーロッパ文学の発展における革命・民族解放運動の役割、東ヨーロッパ文学の歴史的意義、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの諸文学とヨーロッパ文学の比較的研究、たとえば、極東文学にたいする中国文学の影響、インド文学の世界的意義、アラブ文学のヨーロッパ文学への影響、ラテン・アメリカ文学とインディオ口承文学との関係等のテーマが例示されていることから推察される。

N・コンラドの見解もほぼこれに近い。氏は論文『現代の比較文学の諸問題』⁽³⁾において、「文学の相互滲透」、あるいは「国際的文学連関」が世界的規模において文学発展に重要な役割を果たしていることを指摘するとともに、「比較文学」のもっとも重要な研究対象としてこの「相互滲透」をあげ、ま

ず、その事実そのもの、その歴史的理由、性格、経路、手段、さらにその結果を究明すべきことを主張している。しかし「研究資料」においてと同じく、コンラドにあつてもこの「相互滲透」なり「影響」なりが一般にいかなる法則的要因によって可能になるかという問題にはあまり注意をはらっていないように見える。コンラドが執筆を担当した『世界史』(ソ連科学アカデミー版)第六卷第三章「一七八九—一八七一年の文学と芸術」、第二節「文学・芸術における基本的な諸過程と諸傾向」はとくに一項を設けて「文化交流の世界的過程」の問題に言及しているが、そこでは、文化交流を可能ならしめた要因ないしその歴史的理由としては、世界の経済的接触の拡大、伝達手段の発展、人的交流の機会の増大が指摘されているにとどまる。

しかし、コンラドも「相互滲透」だけが「比較文学」の唯一の認識対象であると主張するのではない。氏は、「比較文学」がこのほかに、過去に歴史的共通性をもつ諸文学の比較、諸民族文学の比較類型学的研究(一定の歴史的共通性の中で生まれた現象を対象とし、その一般性と特殊性とを究明する)、なんらの共通性も連関もない諸文学の比較類型学的研究(たとえば東西の聖者伝についての対比的的研究によって究明の完全さをはかる)、相互に無関係な諸現象の類型的共通性の解明(たとえば東西の軍記文学について類型的等質性を把握する)等々の研究をめざすべきことを主張している。

これにたいして、N・ゲーディは論文『ロシアの革命前およびソヴェトの科学における文学の比較研究』において、文学学

の比較的方法の認識対象を、発生的血縁性や影響や借用などの有無とはかわりなく、なんらかの面で等質的な類似的な文学現象に限定し、その対比(「歴史類型学的比較」とも氏は呼ぶ)によって諸民族文学の独自性と文学史発展の一般的現象とを把握することを研究の目的として主張している。

以上のまったく別種の二つの見解にたいして、ニエウボコエヴァやジルムンスキーは「相互滲透」と類似的文学現象との両者を「相互連関と相互作用」の認識対象として設定している。しかし、その点では共通性をもちながらも、両者の現象がいかにして生起し、かつ両者がいかなる関係に立つか、また、それらの現象についてなにを認識課題となすか、の点では両氏の間にかんがりの相違が存在するように見える。

まず、ニエウボコエヴァは論文『諸民族文学の相互連関と相互作用の研究の若干の諸問題』において、文学的連関というものを、「接触的連関」、すなわち諸民族文学間の交流、と、「文学過程の歴史的に条件づけられた類似性による連関」、すなわち、接触とは無関係に、類似の歴史的条件のもとで生起する類似の文学現象の発生と発展、の二種に区別してとらえる。そして、氏は、前者の連関については、たとえば接触の時期、経路、通曉度、評価、交流の实体、および接触が積極的な相互作用をもたらし、すなわち好都合な社会的・歴史的条件および前提を明らかにすること、後者の連関については、その比較研究によって世界的過程の「複雑な単一性」を認識し、社会・芸術発展の若干の法則性の意味づけを得る(たとえばリアリズムの

発展の法則性についてなど)ことが目的となるとする(この場合は、類似的現象の非同時的発生の可能性、民族的独自の付随、相互作用の存在などの諸契機を考慮するよう氏は注意している)。

一方、V・ジルムンスキーは論文『文学の比較的研究の問題』において、比較的方法の任務が歴史現象間の類似性と相違性を明らかにし、かつそれを歴史的に説明することにある、と主張したうえで、相互連関と相互作用なる文学現象の生起についておよそ次のようにのべている。すなわち、生産力と生産関係の類似の状況に規定された社会的・政治的諸関係がいくつかの地域に相似的特徴をもつ類型を発生させるように、文学の領域でも社会の発展段階を等しくする諸民族にアナロジが生まれる(思想内容、モチーフ、主題、スタイルなどに)。このアナロジは直接的な相互作用とは無関係に生じる(ジルムンスキーはこれを「歴史類型学的アナロジ」ないし「歴史類型学的合致」と呼ぶ)。他方、それにもかかわらず、社会発展の不均等性から文学現象の非同時性が、また所与の民族の特殊の条件や伝統からその民族的性格が生じ、それらが文学現象の相違性をもたらす。そして、氏はこの「歴史類型学的アナロジ」と相違性の両者を相互作用の主要な前提と考える。しかし、ジルムンスキーによれば、いっさいのイデオロギー的影響は法則的であり、社会的に規定されている。それは外からの一方的な偶然的・機械的衝撃として起こるものではない。影響は所与の国民の社会・文学の民族的発展の内的法則性に規定され

る。すなわち、イデオロギー移入への内的要求や類似の潮流の存在によって可能となる。こうして、氏は、「歴史類型学的合致と文学的相互作用とは相互に弁証法的に連関している」のであり、したがって、両者は「文学発展の過程における同一の歴史的现象の二つの側面」として考察しなければならないと主張する。ただし、社会・文学発展の類似の要求や動向に起因しない作用現象(たとえばロマン主義へのシェイクスピア的作用)については、氏はこれを「相互連関と相互作用」ではなくて「一面的連関」あるいは「過去の文学遺産の創造的利用」として別個にとりあつかうべきだとする。

ところで、氏によればいっさいの文学的影響というものは受容者側による創造的改作を意味する。かくて、ジルムンスキーは、文学の比較的研究が、文学現象の類似性と同時にその相違性およびその歴史的條件の究明を重要課題とすべきことを主張する。

ところで、類似的文学現象と文学間の相互作用との関係については他の論者は必ずしもジルムンスキーと同じ意見をもってはいない。ニェウボコエヴァのばあいは、前記の二種の連関が相互に関連しあっていると、その統一的考察が重要なことを指摘しているが、「接触的連関」が「歴史類型学的アナロジ」の存在を前提にするとは考えていないようである。言及されたかぎりでは、ジルムンスキーのばあいは逆に、「接触的連関」が類似的文学現象の起因たりうるものが指摘されているにすぎない。この点では、ニェウボコエヴァの立場は、諸

民族文学の共通性が文学の「相互滲透」ないし、歴史的運命や直面する課題の共通性から発生すると説くコンラドのそれ(前出論文)に近い。これにたいし、『研究資料』では、所与の国の類似現象の発生の原因として他国の影響は認めず、もっぱら所与の国の相照応する経済・社会・政治・文化的基盤を指摘する。ただし、影響を可能ならしめる要因については言及していない。

以上のような方法論上の見解の多様さにもかかわらず、「諸民族文学の相互連関と相互作用」の研究課題の意味づけにかんしてはほぼ共通のものがみられると言つてよいようである。その第一は、従来のソ連文学史学において軽視され、あるばかりには拒否すらされ、そのために往々にして文学史像の歪曲や研究上の図式主義がもたらされたところの、文学現象間の作用や、その民族文学史の枠をこえての地位の究明を目的とする比較的研究の必要性と妥当性の承認である。第二は、世界史的視野における文学史研究、とりわけ『世界文学史』の編述という課題の遂行に不可欠な方法としてこれを自覚している、という点である。第三としては、諸民族文学の相互連関と相互作用という見地から世界文学史を考察することによって、諸民族の友好と世界の進歩勢力の国際連帯の理念を基礎づける材料を提供するといういわば政治的意図が見られる。第四には、文学発展における積極的相互作用の諸条件を把握することによって現実の文学創造に寄与しようとの意欲があげられる。第五に、第五として、一〇月革命以後のソヴェト文学の世界的役割を具

体的・実証的に究明しようとの志向を指摘することもできるであろう。¹⁰⁾

ともあれ、文学の比較的研究はまだようやく開始されたばかりのところであり、研究成果としても『一八一二〇世紀のロシアの文学的諸関係の歴史から』(五九年)、『ロシア文学の国際的連関』(六〇年)、『諸民族文学の相互連関と相互作用』(六一年)等をあげうるにとどまる。(未完)

(1) Взаимосвязи и взаимодействие национальных литератур (Материалы к изучению проблемы), Известия. 1958, вып. 1, стр. 3—14.

(2) Ibid.

(3) Н. Конрад. Проблемы современного сравнительного литературоведения. Известия. 1959, вып. 4. なお、他の論者は「比較文学」と自己の方法を区別するために意識的にこの「比較文学」という術語の使用を避けている。

(4) ソ連科学アカデミー『世界史』(邦訳版)『近代7』八一—三二頁。

(5) Н. Гуляй. Сравнительное изучение литератур в русской дореволюционной и советской науке. Известия. 1960, вып. 2.

(6) И. Неплюкьева. Некоторые вопросы изучения взаимосвязей и взаимодействия национальных литератур. Известия. 1960, вып. 3.

(7) В. Жирмунский. Проблемы сравнительно-исторического изучения литературы. Изд.

(8) シルトンヌキーは、たゞきは、ロマン主義時代の歴史的ジャンルの発展はフランス革命期の歴史意識の発展、ブルジョア民族の形成過程を反映する民族的自覚の高揚によって規定されるのであり、これを国際的流行による影響現象と見ることは正しくないが、他面で、歴史文学の具体的形態の発展はスコットやバイロンに端を発する国際的相互作用に負う、と説く。

(9) もっとも、ソ連にあってもロシア文化とフランス文化とのかわりに注目した研究(たとえば、В. Томашевский. Пушкин и Франция, 1960.)や、ヨーロッパ文学とロシア文学との比較研究を試みた著作(たとえば、Д. Благой. История русской литературы XVIII века, 1955.)がなくはない。しかし、この研究領域が全体として冷遇されてきた事実は疑えない。

(10) 前掲の『研究資料』、ニェウボコエヴァ論文および「マニシキフ」諸民族文学とその相互作用」(АН СССР, Взаимосвязи и взаимодействие национальных литератур, 1961. 所収)など。

(11) 本書は討議集会での諸報告・発言を収録したもので、本文で紹介したニェウボコエヴァ、グーザイ、ジルムンヌキーの諸論文の加筆されたものも再録されている。方法論についての論文以外にも、О・エゴロフ「ソヴェト文学の国際的作用」、Е・チエルイシエフ「インド諸民族の文学における進歩的動向の発展における文学的連関の意義」、I・コレニシチェフ「ルネサンス時代のスラヴ諸文学における影響と民族的独自性の諸問題」、V・セマノフ「一九一〇世紀の交の中国散文の発展における文学的連関の役割」等の注目すべき実証研究が収められている。

(一橋大学大学院学生)